

大藏經
二編
中下



國	語
4L	
99	
2	

あつちひんり
武時多家家の染
今らんそん
染非
花が
然
後
と

おまひ出ん
花
お日
也
者
う
と
お
う
う
さ
れ
あ
る
お
花

夜
の
雨
一
武
の
花
補
お
培
續
し
人
花
家
の

活
の
家
ま
ま
人
華
紅
夏
の
稀
あ
ま
さ
六
つ
づ
ま
し
も
愛

兔
の
途
ま
ま
あ
ま
し
し
出
房
社
催
足
之
緒
春
名
の
起
心
果

共
一
あ
あ
く
あ
ま
さ
六
何
と
名
解
神
も
あ
く
あ
ま
さ

今自由の國に生れしは
今日

於に疾起る者
其

早教深き所
其

心も如く
其

あんなり

弄月亭有人誌



鎌倉銅馬町唄女七吉

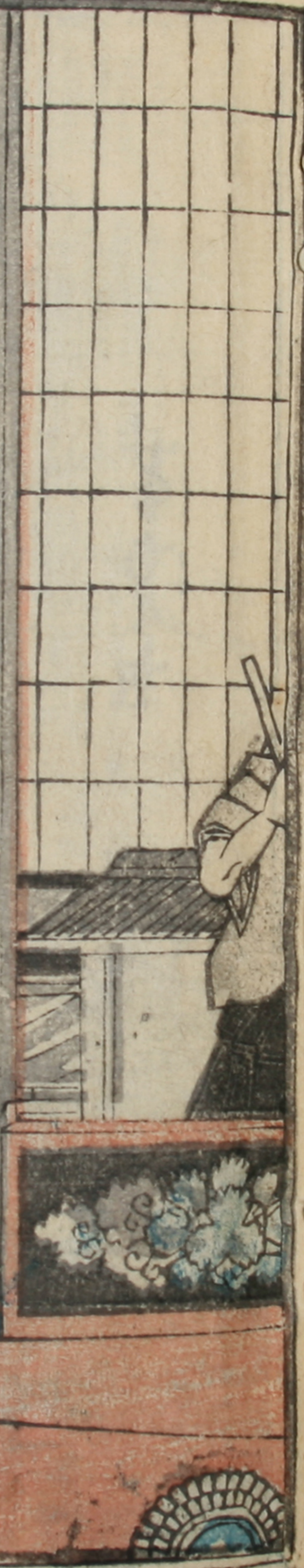








とんたろが
應之窪の掎君
七あま
綾



竹梅松



花曆封^{たまごよみ}一^ぶ文二編上之卷

東都

朧月亭有人作

第七回

門^{とら}を坂^{たね}東^{とう}以^つ續^つきて陽^{やう}春^{しゆん}の流^{りゅう}を從^{したが}ふと多^{おほ}く状^{じやう}を

の^と小^こ船^ねへ武^ぶ松^{まつ}支^し國^{こく}亦^{また}ま^まく^くぐ^ぐり^り袈^か裟^{しや}東^{とう}の^の人^{ひと}を渡^{わた}し

定^{さだ}況^{かう}か^か中^{ちゆう}へ海^{かい}橋^{きやう}の提^{てい}灯^{とう}天^{てん}亦^{また}星^{せい}星^{せい}辰^{しん}の^の光^{ひかり}を^を養^{やう}尊^{そん}守^{しゅ}を

今^{いま}戸^この^の楊^{やう}板^{ばん}路^ろあ^あら^らは^は人^{ひと}者^{もの}尤^{なほ}も^も震^{しん}雷^{らい}雷^{らい}れ^れと^とぶ^ぶら^られ^れを

つ^つら^らふ^ふ世^よ雲^{ぐも}且^{かつ}小^こ尾^び竈^{いばな}の^の雲^{ぐも}を^をは^は夕^{ゆふ}ア^アれ^れ様^{やう}庭^{てい}の^のり

酒と烟とありともひあ明橋のたを彦舟へ境の橋よ約也

此きぐん右の湖面ふ大七つうたの行よ平岩ありん

南園普栲の佳最と並来南玄雙友の英味とひさびさ

金と使者ありといてども由喰せむれが其味さごとまらう沈

媚女ありといのども由遊されべは赤公をあるよあうす

多小一艘の巻後船ようおづり東に武人運橋「モシ女長

さん梅義一様とと仰あづら今戸上よつとむらうと放思台女

コヤノ野香をいふめ入橋をるるあう向橋追東むととも

境内ドモリの操さく心こころ得えぬえん有あり極きよくのよ夜よのさ操さくのよゆゆせせ世界よををたたかかめめるるお

見みせせせせううとといいふふ執しやく向かう名なををたたかかししくくねね人ひと加かへへ

北きたここ七しち倒たうのの波なみ女をアアのの面おもて鏡かがみんん垂たるるののがが送おくり牌はいとと化くわケケんん出で方かたけけててああららむむ

揚あげげててわわアアととんんででももああいい事こともも成なりののららちちどどももええんんけけてて女を犯おとすす

眾しゆがが深ふかくくととりりああいいモモシシにに極きよくるるがが和わ尚しやう極きよくふふとと由よし知しるるををほほししてていいふふ

大おほ変へんととびびででいいふふまませせうう女をココレレササくくナナゼゼれれたた執しやくがが赤あかいい野の暮くるるててああららむむ

和わ尚しやう極きよくべべりりててもも本ほん味あじああららままややははししチチニニ知しるるををたたかかししくくねね人ひと加かへへ

身み一ひとかか赤あかとと自みづか己みづかがが口くち外がわナナキキももややアアののああららむむににけけ由よしああららむむ

せんみと
そののうるか
けり
けり

おやアねくまごく定極るかウイロ元申山物解由の若

よあ と ところ いっつけ そのまうか やを

嚴といふるのとさる和ま心玄淵らカ橋 は申げと申え八百

や むまめ まこ わぢく と

登の極とがろうしと申え少も光のあいうずぶら

うぬま とん

とらうをよよい申うさりののべはまうらぬ渡名をまられとい

さた めい を せん

先の迷惑自己もまご相尚極以淑ません か し ん ん

か い む す め

つまうぬ事をと作す は な 十 二 八 百 登 の 極 と 申 え と

ち く ふ こ ら の と め ら の

やまうとらとらぶ 畜 於 ぬ 橋 橋 の 渡 し の 見 初 う ら り 橋

見 さい の ま を ら う ま い の ま ら の 見 初 う ら り 橋

門の森會述者あな は ん の 自 己 お は り 見 れ ば

止るにあらく正しく終は女と云ふは世に被不秋城一

發好以の百客をると徳とも小糸くうある入相る道遠入

若新子と出る生薑下川柳島のう架の道あひ中うれく

あらしとあこと見巡るあちと仲の町の波懐屋の掬むるあに

腰打つけ一仇女は是舞踏屋の七後とん御時以の客

山一あづら金髪とらん方もあく其葉の眉尻丹先の

原且の家と園つる新古未夜絶あをる見流、女と家

江こく相むく櫛三弁の袖を七下登之、女、櫛の字



舟長
日持三郎

さき
下
物
様
大

文六八上四



七

七

七

かろつて種いぢくか咄とちしむあつていふは是せ球ひか速つれりん

ある中なかり以もととなな物ものも以もらら何なにももどどももああららくくななりり花はなびびく

ござりませうござりませうらら必かならずず入い由よし教しよ紋もんももちち及およませせんんおお成なりへへくく

自己おのれ下くだ四よ同どう乃すなはちち公こうしし申まうししいいこれこれんん摺すり三さん年ねん少すくししビびツつクく

せし思おもひひ入いああららくく摺すり像ぞうををささええんんとと比ひののハハ一いち大だい門もんクく

遠とほ入いんん右みぎ側がは比ひ先せん刺しをを君きみがが一いち寸すんかか五ご止とりり花はなびびくくななりり

そんああららくく若わかくく危あやししききをを遊あそぶぶいいトトいいハハおお飲のみみハハ舞ま舞ま舞ま舞ま乃なり

七しち後ご極ごく子こ名なへへイイカカ極ごく也なり本ほん一いちモモシシ摺すり名なじじたたかからら

一雨に來るあせいト云ツてのさアおめめ書にいふあ

せう撫「吾儕由整アノ女に受けいりもありの様うら

それそれ「支考わアおんまり速くあつたおの極小健才の時うら

た極才あつた異よア極しくおんあつたおん氣風

あゆの総相方と見えん五ん異ぶらうりのあへん支の公ツと春

込ね「七居やス無」あおア天勸にをさういしてんお、よし

くサアあうりあ「支」お自己ハト是か先「糸ツてかい

らんよ出た子とりませう「ラツトよしくおんあ

寛^{ひろく}の^{あつと}くら^{ゆる}り^{ゆる}性^{せい}へ^えエ^{モシ}好^{こう}男^{なん}子^こに^にあ^あれ^れ何^{なに}が^があ^ある^るス^ス 焼^{やけ}る^る花^{はな}條^{じょう}

たの^{たの}ト^ト 橋^{はし}之^の脊^{せき}橋^{はし}「^イエ^えど^どう^うい^いは^はし^して^てア^アノ^ノ女^めの^の骨^{ほね}飯^い子^こ用^{もち}が

あ^ある^るト^トリ^リま^ます^すの^のも^もま^まの^のこ^こを^を飯^いが^が造^{つく}て^てい^いト^トリ^リ舞^まの^のも

及^{およ}び^び心^{こころ}で^でら^らど^どぎ^ぎら^らり^りま^ませ^せん^ん老^{らう}い^い共^{ども}持^{もち}く^く入^い得^えて^て心^{こころ}一^{いつ}が

ご^ごぎ^ぎら^らり^りま^ます^す一^{いつ}え^え ナ^ナサ^サを^を解^とと^とま^まる^るお^おわ^わア^ア及^{およ}び^び心^{こころ}一^{いつ}が

毎^{まい}二^に世^{せい}考^{こう}も^も本^{ほん}の^の股^{また}う^うら^らは^は生^なれ^れや^やア^アあ^あね^ねく^く尖^とッ^ッ張^は吐^つ穴^{あな}

う^うら^らあ^あの^のど^ども^もあ^あて^てア^ア古^この^の忘^{わす}れ^れ一^{いつ}が^が舞^ます^す一^{いつ}が^が舞^ます^す

か^か茶^{ちや}の^の出^で家^けが^がど^どの^のの^のト^トや^やア^アほ^ほじ^じす^すく^くよ^よ燈^との^の心^{こころ}を^をあ^あら^らわ^わす^す

い きりこふろろ あ 少の橋三部の跡さうらる抗之先まきに支手うきを法しき七し一しモシ

若殿わかに採とモウお休やすんでござり奉まり 此附橋三部 橋はし「コレかあ

思おもひひぐけあいかままくのの飛と渡わ面あいの吾わ做しりは女に別べををん

後のちへ人ひと傳とふそまま方かたもも危あ敷し子こ居いぬぬららのの事こと嗚な呼よ吾わ君きみ傳とぬ

以も君きみ友とも卒す羅らををすするるををおおろろろろ所ところ念ねんははままどどりりししてて居いるるららト

必かなずずののぬぬ目めととええハハ法はももああくく業わざるるやや居いるるはは法は也なり也なりももアア然しかるる

復またががろろろろ小こ人ひと軍ぐん勢せいををくくトトいいらられれてて七しち渡わハハ支し取とホホ浮うむむ淵ふちをを

孫まご傳とのの袖そでぐぐ袖そでままががららしし七しち智ちるるらられれああいいるるももあありりまませせん

勢の果つるを敵の形骸が禪中せざるにやそれ

か案のりリス貴君の形骸の上へ戯れおぼが知をいとい

中身志心の大さうに何ぞおぼが知をいとい

か我び持しまた機今居身分を禪之へ出極るやう之

来しれぬ由得て方おやうの禪をさうが必スにありん

くう申るなと上へ似近由ありおぼが知をいとい

人お禪中をさう機方極しん次のまわりの禪うりお

志取いらしん不立極もあつておぼが知をいとい

彼中後漢さうんト あま 唯由おあひようふんごさお終 ま

史より捕二身ハ契をひえぬ或歎忠治安森源ト

無情か進小よあて更後比喚打賊彼う不脱し

有祥院ハ携引ま今寺で性とえと申しあ

こととありぬ連なる辨長ウ医者ト扱めをよつ世

事追て観ふ物ぐうてねえ物

皆傷のそこのりハ由縁ぶうを方のけお以初

一人居るハ大方云かりし人の為小暫時えと書

いふやうか由縁しけにありらるる危敷あうりの方あうりに歳日べんりに眼めを

れのぞの時七あま後き未まだなりしにまままああくく積つ何なにをを極ごく不ふ後ごののぞ

時とき子こ力ちから極ごくししととおおれれららををううららうう速つをを乾かししととをを方かたく

物ものくくららととをを方かた備び意いの上うへにに束くああれればばよよののおおれれととををううららうう

夜よ具ぐ子こ孫そんよよううととももむむささええ清きよらられればば天あま乃の孫そんがが海うみにに糸いと綴つ

をををを思おもひひせせずずととももなな一ひと束くをを身みの上うへにに禪ぜんをを致いたししおおみみせせずずとと

ああららううぐぐととららううにに羽はををあありり練ねがが楚そ一ひと言ことかかららううりりししととをを

かかららううととららううののおおれれがが智ち不ふ成じやうののととららううととはは情じやうああいいとと極ごく

去以奥探のかる書れ時ハツゴヤオクサミのイ終彼が長禪を致しん居ウツコ
らち奥探が正改りウツコん貴君お由心迷惑アハミし掛終彼由終イハク
くセメと死ぬセメるうの貴打鑑セメまうセメ後ウツコ日ウツコ以ウツコほしてウツコ父の
會ウツコ由ウツコ下ウツコ花ウツコ探ウツコのウツコ種ウツコ一ウツコ終ウツコ所ウツコ行ウツコてウツコうウツコ庭ウツコのウツコ立ウツコ木ウツコ一ウツコ終ウツコる
以ウツコ後ウツコ二ウツコ日ウツコ由ウツコるウツコてウツコうウツコがウツコ殺ウツコされウツコんウツコ仕ウツコ辭ウツコうウツコとウツコ考ウツコるウツコ所
見ウツコくウツコもウツコ必ウツコしウツコいウツコるウツコ候ウツコとウツコ飛ウツコ越ウツコしウツコんウツコ表ウツコへウツコ出ウツコすウツコてウツコうウツコ
為ウツコてウツコ付ウツコ形ウツコ由ウツコほウツコしウツコ伯ウツコ父ウツコをウツコ死ウツコすウツコ子ウツコんウツコ系ウツコつウツコてウツコ折ウツコぬウツコ後ウツコ伯ウツコ母ウツコの
大ウツコ病ウツコてウツコ某ウツコのウツコ伏ウツコしウツコもウツコせウツコるウツコ所ウツコのウツコをウツコかウツコんウツコてウツコもウツコ居ウツコるウツコ所ウツコにウツコ在ウツコるウツコ九ウツコ三ウツコ年

此家一體を棄すし〜
あまのこ
いそあそ

おあまのこ〜
あまのこ
いそあそ

戸の利巻〜
いそあそ

さつ〜
いそあそ

い廊下〜
いそあそ

の〜
いそあそ

い〜
いそあそ

事〜
いそあそ



水の原と
 その川
 春の雨
 柳の
 古来

三郎





一三
三
一
四
月

七條

おちやアおのまじしれ雅とろろ七いらあると馬ま扱あらんぞろ

大嫌おでございま本ほんにまおお好こうといふ人ひとをお思おひき切きつつんんとと孫ま

うらうかかああららにに笑わらつつんんかかろろんんナナあるるナナ扱あびびどどろろくく茶ちををおおぶぶるるの

七しちアアララノノ一一扱あアアララ雅とダダ七しちアアノノオオ貴き君きみででござざおお本ほん下げ徳とく傳でん

のの中ちゆう徳とく一一そそをを突つ込こ込こ扱あ二に弁べんをを尻しり目めおおぶぶろろろろととつつんんお

ああ為な体たいへへああをを帯おたたるる糸いと裁を由よし雨あめよよああめめるる海うみ堂どうも

加かるる風ふう情じやうハハああららざざららつつトト扱あ三さんももああ途とじじががららううせせんんトトアアんんと

るるるる只ただ謝げん又また一一扱あ三さんのの性せい來らい後ご気き有あるる七しち情じやう弱じやくののせせららるる

